

台湾：1945年で変わったもの、変わらなかったもの

——言語と教育の面から——

前田 均

1. 台湾に残る「日本」
2. 中国語を話さない台湾
3. 台湾人高齢者の回想録
4. 日本語文芸の意義
5. おわりに

キーワード：台湾、日治時期、日本語世代

1. 台湾に残る「日本」

台湾の学校の卒業式には「仰げば尊し」が歌われる。1984年製作の台湾映画『冬冬の夏休み（冬冬の假期）』の冒頭の小学校の卒業式の場面で効果的に使われている。実はこの映画の最後に流れる曲も「赤とんぼ」で、最初と最後が日本の歌というわけで、映画マニアの中ではちょっと評判になった。この後、侯孝賢をはじめとして台湾の映画が日本でももてはやされたが、それ以前に公開されたこの『冬冬の夏休み』は一部で評価されただけであった。実際にも卒業式を控えた6月ごろは小学校から「仰げば尊し」の練習の声が聞こえてくる。

この「仰げば尊し」は作詞・作曲ともわかっていない。これと対照される「蛍の光」はスコットランド民謡とわかっているのだが、いまだに解明されていない。この歌が台湾で歌われるのは明らかに植民地支配の名残りだが、私が「あ

の歌は日本から入った。」と台湾人に言っても、多くの人は「世界中で歌っているんでしょう。」と言うので閉口していた。

音楽教育の場面を見てみると実際には音楽教科書には日本の曲は皆無に近い。教材として歌われるのは元は外国曲の『旅愁』（ふけゆく秋の夜）の中国語版『送別』（長亭外古道邊）ぐらいであろう。しかもこれは20世紀のはじめ中国から日本に留学した李叔同が大陸に持ち帰ったのちにそれが台湾にもたらされたわけである。それは「『二二八事件』以降、日本の唱歌教材は禁止された」⁽¹⁾からである。

一方でカラオケでは日本の流行歌が日本語・台湾語・中国語で歌われている。『正論』2005年7月号の「ハイ、せいろん調査室です」という投稿欄には「台湾台北市の黄守禮さん（元大学教授・72歳）」の次のような投稿が載っている。

少年時代受けた良き詩情は永遠に心に残り、精神を潤おしてくれるものです。今でも週に一度か二度は、台北市重慶北路二段二四号二階の筱川というカラオケに、古き良き時代の日本流行歌を歌いに行っております。その店には良い曲が多く置いてあります。黄さん（先月号に昔の歌について投稿した人——引用者注）、台北にお見えの機会がありました

(1) 劉麟玉著『植民地下の台湾における学校唱歌教育の

成立と展開』2005年、雄山閣出版、198ページ。

ら、是非お立ち寄り下さい。一緒に懐古の懐メロを歌いましょう。

但し古い中国語の歌もカラオケの店では懐メロ化しているようである。『薔薇处处開』『漁光曲』を日本人の私が歌うと大拍手が起こる。

あと教育界で日本の植民地支配の名残りがあるのは今は消えたが「呉鳳」の載った教科書であろう。清朝時代に原住民⁽²⁾と漢族の通訳をしていた「呉鳳」が首狩りの習慣をやめさせるため、「そんなに首狩りがしたいなら明日の朝、赤い服を着て赤い帽子をかぶった人が通るからその人の首を狩れ。」と原住民に言い、自分が赤い服を着、赤い帽子をかぶって村はずれを歩き、原住民に殺されたが、世話になっている呉鳳を殺してしまったことを悔いて原住民は首狩りをやめるという物語は日本でも国定第3期国語教科書（いわゆる「ハナハト読本」）にも掲載され高齢者の印象に残っているが、台湾総督府の教科書にも採用された。それが戦後の台湾の教科書にも引き継がれたのである。日本統治時代、国民政府時代を通して誤った原住民像を流布するのに利用されてきた。台北市士林にあった「中影文化城」（映画村）のろう人形館でも「偉人」の一人として呉鳳が展示されていた。私は1986年9月から1年間台北の中国文化大学で日本語教師をつとめていたが、ちょうどそのときに原住民による呉鳳に対する異議申し立てがあった。これらについては既に駒込武の指摘がある。最近も、下村作次郎編『「呉鳳」関係資料集 一、二』が緑陰書房から刊行された。

学校には孫文・蒋介石の肖像が掲げられていたが「御真影」ではないかと思ったことがある。行事の際には「国父遺訓」が「奉読」されていたがこれも「教育勅語」の復活かと思った。そう言えば日本にある朝鮮総聯傘下の学校には金

日成・金正日の「御真影」がある。私はそれをテレビ等で見るたび笑っている。

それ以外の分野で日本の名残りがあったのは酒・煙草の専売制であろうか（最近では専売制ではなくなった）。総督府専売局が台湾省政府公売局となっている。所在地は台北市南昌路1段4号であるが、「二二八事件」の舞台となった所である。昨年（2007年）は台湾省政府公売局創立60周年ということで昔の酒やタバコの「復刻版」が発売されたが、その中には戦後すぐに発売された日本酒もあった。総督府時代の日本酒製造の施設をそのまま流用して戦後も日本酒を販売していた時代があったのであろう。酒やタバコは税金を取る上で有効だから日本統治時代をそのまま継承したわけである。

私は20年前、台湾で日本語教師をしていたと言ったが、そのころ大学で日本語を教えていた台湾人にはいわゆる「日本語世代」の人が多かった。この人たちは「国語」として日本語を学習したので「外国語」として日本語を学ぶ大学生に対しては不適切な教え方をすることもあった。例えば日本統治時代にはう行とダ行の区別のない台湾語話者に対してそれを矯正する「どろだらけ」を何度も言わせるということが行われたが、若い世代の台湾人にはそのような「なまり」はなかった。このような台湾人教師と話していると「台北駅までバスで半時間かかります。」などと言われることがあったが、「半時間」は西日本方言である。かつて台湾に住んでいた日本人は西日本、特に九州出身者が多かったのでこのような言い方が残ったのだろう。そういえば街で売っている「てんぷら」は練り物の方でいかにも西日本方言である。アクセントもマイナス2型になることが多い。台湾人の日本語のアクセントについては既に戦前は寺川喜四男、戦後は謝逸朗の研究がある。

(2)現在、台湾では日本人がかつて「高砂族」と呼んで

いた人たちをこう呼ぶのでそれに従う。

他には「文化大学の授業はいつケッソクしますか？」ときかれることもあったが、これは「いつ終了するか」を夏休み前にきかれているので、北京語の「結束」をそのまま日本語読んでいるのだらうと思っていた。これは戦後に発生した独自の日本語であろう。つまり台湾にはあらたな「台湾式日本語」が成立していたわけである。しかも上記の台湾人日本語教師は「国語常用家庭」出身の人が多かったのか自分たちだけでも日本語で会話していることが多かった。このことは若い世代や外省人の日本語教師との対立を生んでいたのも事実である⁽³⁾。

私は原住民の村にも入り込んで言語調査をしてきたが、夫婦間は日本語で会話したり、高齢者が日本語を話したりする原住民の村はある。最近、日本語学会2007年度春季大会（関西大学）では真田信治・簡月真「台湾アタヤル族における日本語クレオール」という発表もあった。

2. 中国語を話さない台湾

現在の台湾の公用語は中国語であるが、つまりは戦後、国民政府によって押し付けられた言語である。日本統治時代は日本語を押し付けられ、戦後は国民政府によって中国語を押し付けられたのが台湾の実情である。いわば1945年までは台湾は日本の一部なのだから台湾人は日本人であってだから日本語を話せ、1945年からは台湾は中国の一部なのだから台湾人は中国人であって中国人は中国語を話せ、と強制されてきたのである。これは戦後の台湾にあって非中国語話者に対する締め出し、中国人（外省人）優位の体制維持・強化、「日本色」排除、台湾人（特にエリート）の発言権排除を作り出してきた。そして台湾ではあらゆる面で「中華文化復

興」等のスローガンにより「中国化」が進められた。あらたな「植民地下の台湾」の出現である。この点では「1945年で変わらなかった」のである。「日本の植民地」から「中（華民）国の植民地」へとされたのは変化であろうか、不変化であろうか。天皇・大東亜共栄圏のために挺身する皇民から大陸光復・中華文化復興のために生きる中国人としての台湾人への改造が行われたと言い換えてもよい。

ところが日本では単純に台湾を中国の一部ととらえる人たちがいる。

内海愛子・田辺寿夫編『アジアからみた「大東亜共栄圏」』（1995年増補版、梨の木舎）の富沢由子による「台湾」の章では日本統治下の台湾の住民を「中国人」と呼んだり、日本語の押し付けについて「何不自由なく中国語で暮らしていた阿福の家族」と言ったりしている。日本で「中国語」というと「北京語」（大雑把に言う）のことだが、台湾語とはまったく異なる言語である。私は、バスの運転手と乗客とが片方は中国語、もう片方は台湾語を話すので通じない状況をよく見た。これが原住民の多く住む東海岸では双方が日本語を話すので通じることもあるのだが。

黄春明『さよなら・再見』（1979年、発行・めこん、発売・文遊社）がもてはやされたことがある。この邦訳には重大な誤りがある。それも台湾は中国語しか話さないと思い込んだ上での誤りである。訳文中から疑問点を指摘する⁽⁴⁾。

「『休憩』にしますか、それとも『停泊』ですか」（中略）この言葉は日本統治時代から使われていて、こういう場所では休憩は短時間寝るという意味、停泊は一晩泊まるという意味だ。（51ページ）

(3) 拙稿「現在の台湾の日本語教育に残る植民地支配の負の遺産」『華南地域日本語教育シンポジウム論文集』1995年、マカオ大学。

(4) 拙稿「『さよなら・再見』原作・映画への疑問」『台湾映画』創刊号、東洋思想研究所(奈良)、2006年。

「休憩」には「シウチー」とルビがつけてあるが、この読み方は中国語だ。「日本統治時代から使われてい」るなら台湾語か日本語で読むべきだ。しかも「こういう場所」での「意味」ならましてやそうできっと日本語読みをするのだろう。

王禎和の『玫瑰玫瑰我愛你』⁽⁵⁾はベトナム帰休兵を受け入れてひと稼ぎしようとたくらむ花蓮の庶民のドタバタを描いた作品だが、その中に「托馬力(日音:住宿)或QK(日音:休息)」という表現がある。読み方は「日音」(日本語の発音)で「トマリ」と「キューケイ」で意味はそれぞれ「一晩泊まるという意味」「短時間寝るという意味」である。つまり『さよなら・再見』の「休憩」も「シウチー」ではなく「キューケイ」と読むのではないか。こういう単語にまで中国語の発音がなされていると考えるのは「中国の一部である台湾」を強調することにほかならず、台湾の置かれてきた苦悶するその歴史に無知であることをさらけだしてしまう。

又吉盛清は次のように言っている⁽⁶⁾。

今日でも台湾人の売春宿になり、女性が身を売っている地域は、かつて日本人によって遊郭街として補強、開拓されたものを、戦後も引き継いできたところが多いということである。これは、日本人が、植民地台湾の中に残してきたマイナスの遺産というべきものであり、反省的に受け止めなければならないものであろう。戦後の日本人の中にある台湾イメージは極めて貧困なものであり、旅行業者が流布した「男性天国」というマイナスイメージが先行してしまっているが、ひるがえって考えてみると、マイナスイメージの大半の責任は、日本統治時代の遺産から発生したものであり、日本人が負うべきもののなのである。

心したいものである。

私もまったく同感である。誤った認識がかえって日本の歴史的責任を無視する結果を生む。売春システムの「連続」である。

著者の黄は自分を「台湾に生まれた中国人である」(2ページ)と認識している。作品中でも主人公は自分を「中国人」といつている。もちろん自分をどう認識しようと自由であるし、どのような作品を発表しようと自由であるが、その認識が作品の矛盾点となっていたら、作品の価値も損なわれるし、作品の説得力もなくなってしまう。

主人公は「中学に通っていた頃、生徒から尊敬され慕われている歴史の先生が(中略)授業中目に涙を浮かべて私たちに抗戦の歴史を語った」(12ページ)のを聞いて「生まれるのが遅すぎて、八年の抗戦に参加できず、日本の鬼どもをやっつけて同胞の仇を討つことができなかったのを恨めしく思った」(12~13ページ)そうだが、この「歴史の先生」は「南京出身」(12ページ)なので「外省人」だ。この外省人の「歴史の先生」は「外国の雑誌に載っていた南京大虐殺の写真を見せてくれた」(12ページ)とのことであるが、「二二八事件」については何も教えなかったし、その際の「虐殺の写真」は「見せてくれ」なかったのだろうか。

黄は「日本の友人の皆さんに希望したいのは、第二次大戦までの日本の台湾に対する植民地統治の経緯と結果を忘れないでいただきたい」(3ページ)と言っていて、それには私も大賛成だが、それなら「霧社事件」など、台湾での歴史を例に出すべきであって、大陸での例を出しても適切ではない。むしろ、「抗戦の歴史を語」ることは「中国の正当な継承者である中華民国」を中心とした歴史観であり、それによる

(5)台北・洪範書店、1994年2月、初版。引用箇所は165ページ。この作品も同じ題名で映画化されている。

(6)『日本植民地下の台湾と沖縄』1990年、沖縄あき書房、70ページ。

と、台湾は「偉大なる中華民国」によって「解放」され「祖国の懷に戻った」ことになるが黄はそれを肯定し、主人公に自分の歴史観を代弁させているのだろうか。仮に「解放」されたという歴史観を持ったとして、ではその後の「二二八事件」や「白色テロ」に対してはどう考えているのだろうか。

『解放読本にんげん』のある1冊⁽⁷⁾の「沖縄の問いかけもの」には「沖縄の中学校の先生」である「M先生」が「戦争の結果。二つに断ち切られた国は、どこどこでしょう。」と問うて、「ドイツ、朝鮮。」「ベトナムも、中国も……。」と生徒の答を引き出していくのだがこれでは台湾は中国の一部ということになってしまう。「解放教育」は中国による台湾の植民地支配を望んでいるようだ。なおこの『にんげん』には丸木俊が表紙を描いているが丸木は戦争中、戦意高揚のための絵本を描いていた⁽⁸⁾。『にんげん』の編集委員の一人は国分一太郎だが国分は戦争中、「南支」で「聖戦」の宣撫工作に励んでいた⁽⁹⁾。戦争・植民地支配肯定の人たちによる「解放（教育）」なんて意味があるのだろうか。

台湾には現在も「統一派」「独立派」の両者がある。細かい点については議論する場ではないので省略するが、少なくとも「1945年までは日本の植民地だったが、1945年からは中国の植民地になった」と考える人たちがいることは事実である。つまり「中国」と「台湾」は別の国であり、「中国」の一部であることを拒否する人たちである（細かい意見の相違はある）。

日本にはなぜか、台湾は中国の一部であり、台湾に対する植民地支配も対中国侵略の一部であると考え人が多いが、その考え方自体、

「中国」が台湾を支配すること、つまり新たな植民地支配＝侵略を肯定していることに気づいていない。

もっと極端には「日本は中国の一部であった台湾を侵略したが敗戦により台湾は中国に復帰した（が、腐敗した国民党政権の圧制に住民は苦しんでいるので北京の中共政権によって「（再）解放」されるべきだ）」とでも考えているのではないかと思える発言をする人は日本に多い。

たとえば最近出版された日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』（2004年、日本僑報社、262ページ）には「二二八事件」について「『二・二八起義』は国民党の解放区への侵攻を後方から動揺させ、人民解放軍と結合した作用をしたと高く評価している。」という記述があるが、このような解釈を肯定するのだろうか。

「台湾正名運動」というのがある⁽¹⁰⁾。これまで国民政府によって「中国」の名を押し付けられてきたのを「台湾」と改称する（「名」を「正」す。『論語』にある表現）ことによって真の姿を取り戻そうというのである。特に今、日本が台湾人に発行している外国人登録証の国籍欄は「中国」との記載を押し付けられているがそれを「台湾」にしようという運動がある。なぜか在日本朝鮮人教育で「本名宣言」に取り組んできた人たちは国の「本名」を取り戻す運動に冷淡である。

最近、日中韓3国共通歴史教材委員会『日本・中国・韓国＝共同編集 未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史』（2005、高文研）という本が出た。しかし「3国」だけが「東アジア」なのであろうか。台湾は「国」ではないとして排除したのであろうか。今後、台湾も入れて

(7) 1975年4月1日6訂版、明治図書。

(8) 櫻木富雄『探書遍歴』1994年、新評論、98ページ。

(9) 拙稿「国分一太郎の戦時下の作品について」『天理大学学報』第187輯、1988年2月。

拙稿「国分一太郎の従軍体験に基づく作品群」2001年3月24日、『前田富祺先生退官記念論集日本語日本文学の研究』同刊行会、131頁～138頁

(10) 高永謀『台湾正名100』2005年、玉山社。

「4国」にするつもりであろうか。近現代史なので日本統治下の台湾も扱われているが、台湾に行ったこともないらしい中国人が当該部分を執筆している。これぐらいなら私を書いた方がましであろうが、「台湾は中国の一部」だから中国人が執筆するのであろう。しかもこの本は「対話と討論を通じて歴史意識を共有」しようという狙いを持ったものだというのだが、日本版語では「北朝鮮の人民軍が半島南部の解放をめざして南下をはじめたのです。」(188ページ)という箇所があるのに中国語版には当該部分はない。内容も「共有」しないで「歴史意識を共有」しようというのであろうか。その後中国語版は「修訂版」も出たがこの部分はそのままであった。

3. 台湾人高齢者の回想録

最近、台湾人の日本語世代による回想録の出版が盛んである。気のついたもののみ一覧にしてみよう。資料とするため最近のものでないものや日本人によるもの(インタビュー等)も入れた。

台湾での出版

呉建堂『孤蓬万里半世紀』1978年10月1日、私家版。

鄭春河『二十一世紀への元日本人の遺言』1996年1月、台南・私家版。

林彦卿『非情山地』2002年4月、私家版、466ページ。全文日本語。

林溪和『台湾の真相と心の声』2003年1月、台中・丸善出版社。著者は1923(大正12)年生まれ。

日本での出版

林景明『知られざる台湾——台湾独立運動家の叫び』1970年1月15日、三省堂。

林文堂『台湾哀史——蔣政權と戦い続ける独立運動者の手記』1972年2月25日、山崎書房。本名、林一忠。

柯旗化『台湾監獄島』1992年7月25日、イースト・プレス。

呉火獅『台湾の獅子』講談社、1992年11月30日。

蔡徳本『台湾のいもっ子——日本語で書かれた戦後台湾本省人(いもっ子)の隠された悲劇』集英社、1994年9月。

連根藤『日本人に知ってほしい台湾共和国独立のシナリオ』1995年4月28日、はまの出版。著者は1936年生まれ。

楊基銓『台湾に生を享けて』1999年3月、日本評論社。

鄭春河『台湾人元志願兵と大東亜戦争——いとほしき日本へ』1998年12月、展転社。

野口毅『台湾少年工と第二の故郷——高座海軍工廠に結ばれた絆は今も』1999年7月、展転社。

張有忠『台湾人の台湾』1999年12月3日、218ページ。

蔡焜燦『台湾人と日本精神(リップンチェンシン)——日本人よ胸を張りなさい』2000年7月15日、日本教文社、255ページ。現在は小学館文庫から発売。

陳惠美『台湾人従軍看護婦追想記——すみれの花が咲いた頃』平成13年11月3日、展転社。「南方要員錬成所」。

陳紹英『外来政權圧政下の生と死——一九五〇年代台湾白色テロ、一受難者の手記』秀英書房、2003年9月10日。

許世楷・廬千恵『台湾は台湾人の国』2005年4月7日、はまの出版、245ページ。

黄華昌『台湾少年航空兵——大空と白色テロの青春記』2005年9月10日、社会評論社。

阮美妹『台湾二二八の真実——消えた父を探して』2006年2月28日、まどか出版。

廬千恵『私のなかのよき日本——台湾駐日代表夫人の回想五十年』2007年4月16日、草思社、201ページ。著者は1936年生まれ⁽¹¹⁾。
平野久美子『トオサンの桜——散りゆく台湾の中の日本』2007年2月20日、小学館。
猪俣一（聞き手）『かつて日本人だった台湾日本語族の証言集1 愛する日本の孫たちへ』2007年4月21日、発行・桜の花出版、発売・星雲社。

台湾の政治が民主化されたのに伴いこのような記録が出版できるのであろう。このような記録は学界からも注目されていてそれらを（その時点で）紹介した李季樺「戦後日本有関台湾史料の日文自伝・回憶録概介」（『台湾史料研究』財団法人呉三連台湾史料基金会、第11号、1998年5月、46～56ページ）もある。多くは日本統治時代、特に戦時下、「光復」、二二八事件、白色テロを記述している。これらは日本語世代が日本語で書いたものであり、やはり中国語をしゃべらない台湾が存在していたのである。上記のように中国語の押し付けはこのような発言を押さえつけてきたわけである。楊千鶴氏は「中国から来た政権の不法な圧政への反感もあって、中文を習う気になれなかった」⁽¹²⁾と言っている。このような台湾人は多いのだ。台湾の川柳の一句に「日本語を本気で学ぶ終戦後」というのがある。日本統治時代には押し付けられた言語である日本語なんか勉強する気もなかったが、戦後になって「中国から来た政権の不法な圧政への反感」で「中文を習う気になれ」ず日本語を本気で学ぶ自分たちの姿をみずから描いた川柳である。

戦後も台湾に「留用」されて教育にあたって

いた民俗学者の国分直一は帰国後、かつて勤めていた台湾第一高等女学校の同窓会報に1950年の時点で「台湾の最近の消息」と題して次のように書いている（『緑ヶ丘通信』復刊第一号、昭和25年1月印刷）。

終戦後、興奮の中にあの『光復の日』を迎えた台湾の人々も次第に反省的、批判的になり、二二八事件を界として、急角度にわれらの祖国と祖国の人々への態度を変えてきました。（中略）日本への郷愁といった気持ちは祖国への現滅の悲しみから日々に強くなって来てゐることは真実でせう。日本料理の流行、日本語の盛行などその一つのあらはれでせう。

国分も戦後になってのある時期から「日本語の盛行」があったことを証言している。

ただ私が危惧するのは、あたかも日本の植民地支配が近代化を促進したという記述に終始しているのではないかということである。日本時代（台湾の高齢者は日本統治時代を台湾語で「日本時代（ジップンシーダイ）」と言う）は灌漑設備が出来て米がよくとれるようになった、米の品種改良が進んだ、道路・鉄道・学校・病院・発電所・上下水道などが完備された、「分類械闘」がなくなって平和で安全になった、マラリヤや阿片がなくなった、などである。中にはかつての戦争を「聖戦」と考える記述もあって日本人として面食らう。日本では一応の「戦争責任（侵略責任）の共有化」があるのだが、台湾では「皇民」「大東亜」が化石化してしまったのではないか。靖国神社への参拝をすすんで行く台湾人もいる。もちろんそれに対しては高金素梅氏のような反対運動もある⁽¹³⁾。しかも中

(11) 朝元照男は内山書店『月刊中国図書』2008年1月号の「二〇〇七年読書アンケート」でこの本を特に取り上げている。

(12) 楊千鶴『人生のプリズム』1993年米国版、1998年台

湾版、南天書局、20ページ。

(13) 中島光孝『還我祖靈——台湾原住民族と靖国神社』2006年9月、白澤社。

国大陸中心の戦後の教育（特に歴史、地理）が戦前の台湾を化石化してしまったのではないか。

その典型例が司馬遼太郎『台湾紀行』の案内役をつとめた「老台北」こと蔡焜燦氏の『台湾人と日本精神』である。同氏は自分が日本統治時代に受けた教育について「すばらしい」教育だったとして、ラジオ放送を校内放送で流す教育に使用した清水公学校『総合教育読本』（昭和10年8月）をみずから復刻出版している。

こういう日本統治時代に対する評価については、許介麟『日本殖民地統治讚美論総批判』（2006年、文英堂）という反論の本も出ている

ところが日本統治時代の実態はどうだったかというところ、鷲巢敦哉（わしず・あつや）『台湾保甲皇民化読本——皇紀二千六百年記念出版』（1941年）という本がある。台湾はまだ皇民化されていないと著者が怒っている本である。また台北第一師範学校附属公学校研究部『公一の教育』（1933年）には公学校の悲惨な実態が描かれている。著者たちは師範学校の教師なので同校の卒業生に公学校の実態を知らせてもらって教育実践に生かそうとしたのであるが、卒業生からの回答は教育の充実とはほどとおい実態を示すものであった。

それと「二二八事件」「白色テロ」の被害者意識が大きいということである（事実その被害は大きいのだが）。それだけに自分たちを弾圧した中国を「前近代」、日本統治下で発展した台湾を「近代」「文明」ととらえて別物と見る意識が高い。

その一方で私が台湾で勤務していた20年前は（国民政府によって押し付けられていたにせよ）「大中華」の一員としての台湾・私という気持ちを持っている人も多いように思われた。とするとあの戦争を「聖戦」ととらえる人は「大日本帝国」の一員としての台湾・私という気持ちが強いのではないか。なら、この点では変化がなかったとも言える。

私にはもう一つの危惧がある。戦後の日本人が見る台湾は、以下のように整理できる。かつての構造を図式化すると、左派は中共支持、反国府で台湾住民無視を続けてきた。右派は国府支持、反中共で同様に台湾住民無視を続けてきた。今は左派は中共支持、反台湾独立でやはり台湾住民無視であるが、右派は台湾支持、反中共でこれは歴史的責任無視と言える。台湾の日本語世代が書く本の中にあたかも植民地支配や戦争を肯定しているかのような記述があると、日本の侵略責任を不問にすることに貢献してしまうのではないか。つまり現在、反中国（反中共）のために「台湾独立派」と日本の右派が連携しているのではないかという危惧である。

ここで最初の話思い出してもらいたいが、「仰げば尊し」を世界中で歌っていると思込んでいる台湾人の存在である。陳培豊氏が既に台湾人は日本に同化したのではなく、「文明」に同化しただけであると指摘している。植民地支配下の「近代化」もその文脈でとらえるべきではないか。植民地時代に学校が建てられ、台湾人児童はそこで学んだが学校自体が近代のものであり、「普遍」である「近代」「文明」をたまたま日本人が持ち込んだだけであり、だからそこでの卒業式に歌う歌も世界中で歌う「普遍」の歌だと思ったのではないか。

4. 日本語文芸の意義

台湾で短歌や俳句を作っている人がいることに日本人が驚いたことがある。これは研究代表者の磯田一雄氏にまかせるが、台湾人が日本語で創作することに違和感を抱いた日本人もいたことを検討しておこう。「台湾人が」とは「中国人である台湾人が」なぜ、という気持ちである。それが誤りであることは既に述べたが、そもそもどんな生き方をしようと自由であり、その自由の中には使用言語の選択も含まれる。

これについては次の井上ひさし氏・丸谷才一氏の発言を見てもらおう⁽¹⁴⁾。

井上 私の周りに、彼らは占領されていて日本語を押しつけられていた、それをいま詠んでいるというのはどうのこうの、という人がいた。押しつけられた言葉でつくるのがいま見てもあわれだというんですね。たしかにそういう見方もできるかもしれないけれども、詠む人が政治的立場とかでなくて、それだけ勉強して愛して、自分を表現することに喜びを見つけているわけですから、傍からどうのこうの言うことはないと思いました。最初から政治の図式でスパッと割り切るのは、このごろあんまり信用できなくなりました。

丸谷 ジョイスが自分の文学を書くのにアイルランド語ではなくて英語で書いたという問題とかなり結びつきますね。言語の問題はそんなに政治論的に割り切れるものではないという気がします。

同様に小林正佳氏も次のように言っている⁽¹⁵⁾。

確かに日本語は、植民地支配の中で押し付けられた言葉であったに違いない。といって、それぞれの個人が自己表現にどの言語を用いるかは、必ずしも「政治的に割り切れるものではない」。たとえ台湾において日本語が果たした歴史的役割が極めて否定的なものだったとしても、だからといって現にそれを自己表現の契機としている個々の人間の言葉さえ同時に封じてしまったら、そこには、政治的問題にも増して重要な表現の自由の問題が露呈してきてしまう。

日本語での創作についてはこれらの指摘に尽きているだろう。台湾人が日本語で創作することに違和感を持ち、何か批判めいたことを言った向きもあるようだが、それでは戦後国民政府が押し付けた「台湾人は中国人なのだから中国語を話せ」と同じことになってしまう。「中国語を話す台湾」は（少なくとも一部の人間にとっては）虚構の存在である。

それと、台湾人が押し付けられた言語は日本語と中国語という大言語だったため台湾人は英語など他の言語を勉強する必要を感じない、という指摘がある。これは卓見だろう。日本語世代の台湾人と話していると押し付けられた日本語ではあるが知識の獲得や娯楽、教養のために有効に活用していることを話してくれることが多い。特に下の世代が英語ばかりに熱心なのが気に入らないようである。

『認識台湾』⁽¹⁶⁾には次のような記述がある。

日本語はとくに台湾人の生活言語になったわけではなく、台湾を『二言語併用』の社会にしたというにすぎない。台湾人は終始日本語を外国語と見做していたため、その習得は同化を意味していない。日本語はかえって、台湾人が近代的知識を吸収するための主要な道具となり、台湾社会の近代化を促進したのである。

やはりこれも「日本語による近代化」論である。しかし文芸創作活動（しかも短歌）までできる日本語が「生活言語」でないとは言えないだろう。

最近入手した戦前の淡水中学校・淡水女学校の短歌集から紹介する。

(14)大岡信『大岡信の日本語相談』1995年11月、朝日新聞社。

(15)「これからの『日本研究』と『役に立つ』語学——台湾で考えたこと」『総合教育研究センター紀要』天

理大学人間学部総合教育研究センター、第2号、2003年。

(16)蔡易達・永山英樹訳『台湾を知る』2000年、雄山閣出版、88～89頁。

日高宇光『淡水学園叢書 第四篇 皇紀二千六百年 奉頌記念和歌集』昭和15年8月2日、(台北州淡水街)126ページ。

日高宇光『淡水学園叢書 第五篇 創立三周年 記念歌文集』昭和15年10月10日、(台北州淡水街)168ページ。

「創立を寿ぎて」

中学五年 黄華太郎 高砂の私学に認定下り
てより早や三年の春は来にけり

中学四年 陳旺次郎 創立の頃に植ゑにし青
椰子の勢よくも伸び栄えたり
「聖戦を憶ふ」

高女五年 詹 妙子 歓送の人に混じりて背
低き老婆伸び上りつゝ旗振りてゐる
「雑歌」

高女一年 周 幸江 父さんは大きな魚を釣
つて来て子供の様にはしやいでゐる

このような教育実践が行われていたからこそ
今も短歌を作れる人たちがいるのである。

しかしキム・チョンミ氏は『台湾万葉集』に
対して次のような批判をしている⁽¹⁷⁾。

一九二六年生まれの呉建堂は、日本帝国主義支配下の台湾で、日本海軍の「軍医依託生」であり(中略)「八・一五」以降も、短歌をつくりつづけ、天皇(制)への親近感も克服できずに、ヒロヒトの葬式を(中略)みて、「まぶたしめらす」とその短歌に書いている。また呉建堂は、日本のアジア侵略に協力させられた時期の親日感情をいまなお克服できず(中略)台湾植民地化を阻止しようとして戦った台湾民衆は、いまでも「台湾の異分子」なのだ。

これも日本統治期の「化石化」であろうか。

5. おわりに

現在の台湾は「中国」の虚構から逃れて真の姿を取り戻しつつあるようである。虚構のベールが剥ぎ取られた今こそ、1945年を区切りとしない研究が望まれる。

参考文献

五十嵐真子他編『戦後台湾における<日本>—植民地経験の連続・変貌・利用』2006年3月30日、風響社、334ページ。植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の『日本』」、西村一之「台湾先住民アミの出稼ぎと日本語」、上水流久彦「自画像形成の道具としての『日本語』」。

磯田一雄「巻頭言：台湾歌人に詠まれた『辞世』の歌——台湾日本語文芸の意味」『東アジア研究』(大阪経済法科大学アジア研究所)第42号、2005年3月31日、1～2頁。

磯田一雄「台湾日本語文芸の『今』を考える」大阪経済法科大学アジア研究所『アジアフォーラム』第28号。

岡崎郁子『黄霊芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』2004年2月15日、研文出版、293ページ。

水谷尚子『「反日」以前——中国対日工作者たちの回想』文藝春秋、2006年7月30日、229ページ。

本田善彦『日・中・台視えざる絆——中国首脳通訳のみた外交秘録』2006年9月4日、日本経済新聞社、387ページ。

李登輝『台湾の主張』1999.6、PHP研究所。

伊藤潔『李登輝伝』平成8年2月25日、文藝春秋、244ページ。

(17)『故郷の世界史：解放のインターナショナリズムへ』

1996年4月、現代企画室、173ページ。

森宣雄『台湾/日本-連鎖するコロニアリズム』

2001.9、インパクト出版会。

映像資料

『BSスペシャル・地球俳句「台湾・日本語俳句を詠む人々」』NHK衛星第2、2003年1月22日 22:00～。

『素晴らしき地球の旅 台湾万葉集～命のかぎり詠みゆかむ』NHK衛星第2、1995年4月30日 19:20～20:50。

日本会議・企画『新台湾と日本——時を超えた絆』VHSビデオテープ、カラー・52分、2000年11月、明成社。

中国語資料

吳淑真・吳淑敏『拓南少年史 探尋拓南工業戰士們的的身影』2004年8月（台湾）遠足文化事業、223ページ。

郭明亮・葉俊麟『一九三〇年代的台湾——台湾的第一次黄金時代』2004年9月、博揚文化事業、200ページ。「教育制度」「皇民化運動」「學術思潮」「芸術活動」の章あり。

朱珮琪『台籍菁英的搖籃台中一中』2005年5月、（台湾）遠足文化事業、192ページ。

陳柔縉『台湾西方文明初体験』2005年7月、麦田出版。「鋼琴」「西画」「英語」「図書館」「幼稚園」「畢業典禮」あり。